

災害支援・教育復興にむけて

つなぐ



日教組災害対策本部

〒101-0003

東京都千代田区一ツ橋 2-6-2

HP:<http://www.jtu-net.or.jp/>

日教組独自の「震災被災地支援・教育復興ボランティア活動」へ参加して

はじめに

日教組独自の「震災被災地支援・教育復興ボランティア活動」のメンバーとして、岩手県大槌町の小学校への支援活動に行ってきました。2泊3日の短い期間でしたが、このボランティアは、自分自身、学校に勤務する教職員として、とても貴重な体験となりました。また、この体験を多くの仲間に伝えていくことが大切だと感じましたので、支部での会議等の中で報告していきたいと考えています。



現地をみて

報道機関からの情報やすでにボランティア活動にとりくんだ方々からの話で、震災被災地の悲惨な状況は何となくイメージしていました。しかし、実際に被災地に行ってみると、イメージしていたものとはあまりにも違いすぎる光景に、どうしてこのようなことになってしまったのかという思いになりました。以前、ボランティア活動の報告の中で、建物の壁に赤いスプレーで表記されている記号の説明を受けましたが、実際に自分の目で見てみると、ことの重大さを思い知らされました。破壊され瓦礫となった建物ですが、震災前には、そこに人が住み、幸せな生活を送っていた大切な場所だと思うと、何とも言えず、一言で瓦礫と行ってよいのかわかりません。今後、この同じ場所に同じような建物が建つのか、とても心配になりました。

ボランティア

大槌町立大槌小学校の津波と火災の被害を受けた校舎をテレビの映像で見たときには、この子どもたちは、どのような避難生活をし、どのような学校生活を送っているのだろうと考えさせられました。今回のボランティア活動は、そんな大槌町の4つの小学校が、仮設校舎に引越すためだと聞かされ、子どもたちのために、また勤務する教職員のために少しでも力になれば、という思いでとりくみました。

大槌町には、大槌小、大槌北小、安渡小、赤浜小という4つの小学校があります。今までは、それぞれの小学校が、個々に他の学校や施設に間借りをし、学校生活を送っていました。仮設校舎が完成したといっても、4つの小学校の合同の仮設校舎です。2階建てプレハブ校舎が2棟あり、その中に各学校の学級ごとの教室が割り振られています。このボランティアの目的は、



間借りしていた場所から子どもたちの机・椅子を各教室に移動させ、仮設校舎が機能するようにすることです。わたしたち静岡県教職員組合の参加者は、トラックで運ばれてくる机・椅子を指定された各学年の教室に運びました。最初はプレバブの何もない教室に、ここで学校生活ができるのかという思いでしたが、ボランティア、学校の職員、PTA、町教委の協力で、徐々に机・椅子が並べられたり、掲示板などの備品が設置されたりすると、元気な子どもたちの学校生活が想像できるようになりました。手際の良い引越し作業と多くの協力者によって、わず

か3時間ほどですべての教室が整備されました。予定されていた清掃作業も終了しており、すべての活動が終了したと聞かされた時は、正直、まだ体力はあるのに、という思いでした。しかし、担当の方から、早く作業が終われば、多くの職員が学級の事務仕事にとりかかることができるので、まだ作業をしたいという方がいるかもしれないが、ここで終了するという話を聞き、納得しました。よく考えれば、まだ、教室の掲示物や細かな準備物は、担任でなければできない仕事であり、たくさん残っています。学校の職員に時間をつくってあげることも、ボランティア活動の一つだと知りました。

最後に

仮設校舎といえども、この作業を通して、子どもたちが自分たちの教室だという意識をもって学校生活を送ることができるようになりました。まだ、足りないものもたくさんあるとは思いますが、充実した学校生活を送ってほしいと願っています。

今回のボランティア活動に参加して、本当に多くのことを学び、学校のことをいろいろな角度から考える機会を得ることができました。特に、今まで当たり前のように行ってきた放送機器を使った防災訓練は、まったく役に立たないということです。電気を使わずに、危機管理をすることの重要性を知ることができ、各学校に広めていきたいと思えます。また、避難所となっている学校では、避難してきた地域住民に対し、どのように対応していくかが課題となります。学校と地域が連携して、日頃から話し合いをもっていくことが大切だと感じました。

岩手県教職員組合釜石支部の方々が、被災した大槌町を案内してくださり、津波にのみこまれた校舎や体育館、基礎しか残っていない住宅を自分の目で見ることができ、津波の恐ろしさを肌で感じる事ができました。とにかく、復興が一番大切なことだと思います。日本が一丸となり、この危機を乗り越えてほしいと願っています。

